

建設産業図書館所蔵

建設関連小説の紹介

当館所蔵の建設に関する小説の中から、近年に出版された作品を中心にをご紹介します。



桜咲准教授の災害伝承講義 両面宿儺の謎（宝島社文庫）

久真瀬敏也(著)／宝島社／2022年

民俗学者の桜咲竜司は、妖怪や神の名を借りた災害伝承を防災に活かす「妖怪防災学」の提唱者として、テレビにも出演する人気者だ。また、その容姿もあいまって、講義はいつも女子を中心とした学生であふれる。

しかし、高校生の梅沢萌花の彼に対する心境は複雑だ。彼には26歳の若さで亡くなった従兄・修一の研究成果を盗用した疑いがある。両面宿儺は古代のダイオキシン被害者だという発見は修一のものなのだ。

萌花は証拠をつかむべく、桜咲がいる清修院大学へと進学し、彼との接触をはかるが、その人柄に触れるにつけ、姑息な手段を講じる人物とは思えなくなる。桜咲は、なぜ修一の研究成果を自身の名前で発表したのか…そこには彼が果たさなければならぬ修一との約束があった。

現在までに本作および「京都怪異物件の謎」、「大江戸妖怪の七不思議」、「陰陽師の呪い」の4作品が刊行されており、基本的には各巻のテーマとなるキーワードで桜咲の講義が行われるという形式で物語はすすむ。



首都決壊

内閣府災害担当・文月祐美(祥伝社文庫)

安生正(著)／祥伝社／2022年

荒川上流が決壊し、巨大な竜巻が変電所を破壊した。防災専門官の文月祐美は官邸で対応に奔走する。だが大災害の経験なき内閣は、政策ブレインの顧問団に従い判断ミスを重ねていく…。

と、表紙に書かれたあらすじだけ読むと、てっきり気象災害の話かと思ってしまうが、実はトンデモ内閣とそのブレインが引き起こす二次災害、いや人災によって暴徒化する寸前の人々を、どのようになだめるかが本作のクライマックスとなる。

主人公の文月は、どう考えても無茶な作戦でパニックを鎮めるのだが、この作者はこの場面を書きたいがために、ストーリーを後付けしていったのではないか。そう思ってしまうほど、全体的に突っ込みどころの多い作品ではあった。



ブラックマリア (幻冬舎文庫)

鈴川紗以(著)／幻冬舎／2022年

美貌と才能を兼ね備えた女性建築家のマリアが主人公。タイトルからサスペンスを想像していたが、忌まわしい過去を背負った女性の魂が救済される優しい奇跡の物語だった。ヒッチコックの『私は告白する』と同様に、神父への告解が重要な場面となる。ただし、ストーリーは全く別物。

ラストのエンリケ・コルテスの勘違いがほほえましく、待ち人に出会ったときの彼の驚くさまを見てみたかった。



セメント樽の中の手紙 (角川文庫)

葉山嘉樹(著)／KADOKAWA／2021年

プロレタリア文学と言えば、小林多喜二の『蟹工船』が有名だが、本書の著者をなくして小林の文学は成立しなかったという。小林の日記には「『淫売婦』(著者の短編集、表題作は本書にも収録)を読んだことは「記念すべき出来事」と書かれており、志賀直哉に傾倒していた小林に新たな文学を開眼させたいらしい。

さて、本書は短編8編からなっており、表題の『セメント樽の中の手紙』は、現場作業員の松戸が、セメント樽の中に手紙を見つけることから始まる。手紙は、ある女性が書いたもので、クラッシャーの中に落ちて文字通り社会を支えるセメントの一部と化した恋人について綴られており、まさにプロレタリア文学の極致というべき話となっている。

本書に収録された短編は、すべてが陰惨で好き嫌いがはっきり分かれるだろう。ちなみに、表題作のほか、同書に収録されている作品の中で、『濁流』が建設作業員を題材としている。



あめつちのうた

朝倉宏景(著)／講談社／2022年

野球部のマネージャーだった雨宮大地は、甲子園での試合に負けており、チームメイトに甲子園の土をさりげなく差し出してくれたグラウンドキーパーにあこがれて、阪神園芸(株)に入社した。

そして、一年先輩の元甲子園大会優勝投手の長谷、その幼馴染で歌手を目指す真夏、大地に告白した過去を持つゲイであり親友でもある大学野球投手の一志などを交え、彼らの成長を描く青春物語が始まる。

本書はフィクションだが、主人公が入社する阪神園芸(株)は、甲子園球場ではグラウンド整備にとどまらず、施設管理全般および野球大会開催時における運営管理全般を行っている実在の企業であり、その業務内容の一旦を垣間見ることができるのも魅力となっている。